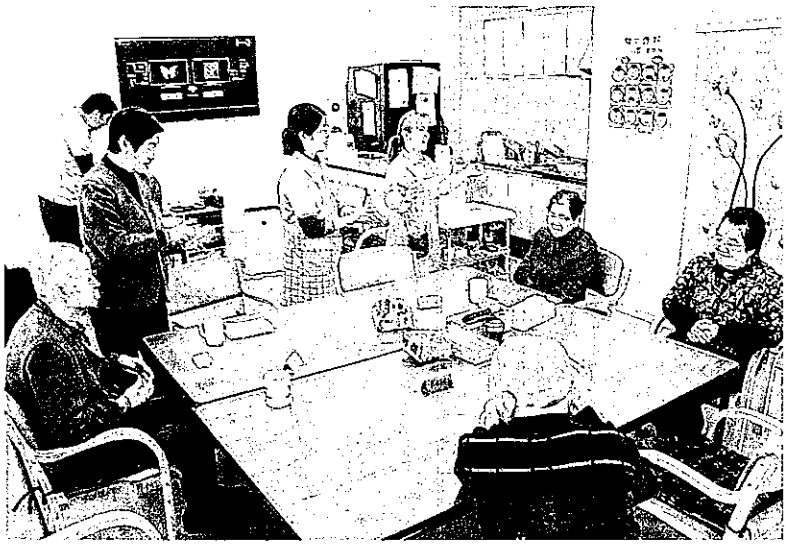


介護の言葉の壁

2世たちの挑戦



デイサービス施設「一笑苑 平井」で中国語の歌を歌う通所者ら＝2月1日、東京都江戸川区、井上亮撮影

中国語サービス連携 「今後の先行事例」

終戦時の混乱で中国に取り残され、その後帰国した高齢の日本人（中国残留邦人）が、言葉や文化の壁から日本の介護施設になじめず、孤立する問題が出ている。なんとかしたいと、各地の帰国者の2世らが中国語の介護サービス事業で連携を始めた。専門家は「今後増える外国にルーツを持つ人の介護問題の先行事例だ」と指摘する。

東京都江戸川区のJR平井駅から徒歩10分弱。デイサービス施設「一笑苑 平井」で2月1日、春節（旧正月）に向け、通所する女性たちがギョーザを包んでいた。部屋には中国の伝統楽器・二胡の音楽が流れる。「あなた包むの上手ね」「たいしたことないわ

中国残留邦人

終戦時に中国で戦闘に巻き込まれるなどして孤児になったり、やむなく中国に残ったりした人たち。厚生労働省の2015年の調査

によると、永住帰国した存命の残留邦人は3600人超。そのうち3割弱が要介護認定を受けている。平均年齢は76歳、全体の93%が70歳以上と高齢化が進んでいる。

よ」。にぎやかな会話はすべて中国語だ。

一日二言だけ

戦後に中国で育った彼女らにとって母語は中国語。慣れ親しんだ文化も中国のものだ。レクリエーションでは通所者の青春時代に中国で流行した歌などを歌う。従業員も、日本に住む中国出身者らだ。

昨年12月から週に2回通う（72）は「前の施設では、着いたときの『おはよう』と帰るとき『さよなら』の二言しか話さなかった」という。

言葉の問題でレクリエーションに参加するのが嫌になり、眠くもないのにずっと寝て過ごした。「ここは言いたいことが言えるし、食事もお腹いっぱい料理が多

く口に合う」と笑う。

「一笑苑」は東京、横浜、埼玉に5カ所あり、3月中に大阪にも1カ所できる。1日あたりの定員は10～20人。帰国者の2世や3世たちが別々に立ち上げた五つのグループが昨年末に協力関係を結び、共通の看板を掲げるようになった。

リーダーの（50）は「同じ理念を持った者同士が知恵を出し合えばよりよいサービスが提供できる」と話す。

親の苦労契機

2世らが介護事業を始めたのは、自らの親世代の苦労を見てきたためだ。さんも帰国者の義母が脳梗塞を患い介護を受けた。「日本語が出来ないと施設で孤立して通いたくなく

なる。要介護度が上がれば言葉ができないと命に関わることもある」とさんは実感している。

介護の現場での言語や文化の壁は、帰国者だけの問題ではない。移民政策に詳しい国士館大学の鈴木江理子教授は、在日コリアン、インドシナ難民、南米日系人など、「早くから日本にいた人たちも同様の問題を抱えている」と指摘する。

移民増の将来

法務省によると、在留外国人約263万人のうち65歳以上の高齢者は約17万人いる。国は4月に改正入管法を施行するなど、外国にルーツを持つ人たちは将来的に増える見込みだ。鈴木教授は「今は労働力としての期待ばかりに目が

行っているが、日本で生活していれば支える側にも支えられる側にもなる。外国にルーツを持つ人たちの高齢化問題は共生社会をつくるうえで欠かせない視点だ」と指摘する。（井上亮